

高橋辰雄

先月遂に四百号という大きな節目の「天外」を出し終えて、今更に過ぎ越し方を思う日々である。

甚だ中途半端な技のままに師匠を失い、まことに暗鬱あんうつとしか言いはいようのなかつた頃、何しる芸術云々ではなく、所謂基本的な上手い書を標榜する師風、社中であるが故に尚更の戸惑いであった。さればここは原点に還つて学び直す可しと、楷書（歐陽詢）を中心とした基本学習に明け暮れていた。そんな折、本屋で見つけたのが江守賢治先生の「楷行草総覧」であった。たちまちにして驚くばかり完璧なその書風に魅

賞状

福井縣 高橋辰雄

右者本院第五回展覽會少年部へ
出品シタル作品ニ對シ審査委員ノ
推選ニ依リ其優秀ナルヲ認メ特ニ
泰東書道院總裁官賞狀ヲ授與ス
昭和九十二年九月九日

泰東書道院

會 頭正二位勲一等伯爵清浦奎吾
名譽會頭正二位勲一等伯爵牧野伸顯
副會 頭從二位勲一等伯爵小笠原長主
總務 長從四位勲二等功藏堀内文治郎
審査委員長正三位勲三等杉漢言長

せられ、夢中になつて学ぶうちに、文字通り私淑するその江守先生が、我師吉井天外と同郷福井県の出身あまごであり剩え少年時代特別に選ばれた者として共に書を学び競つたらイバルであつたことを、当の江守先生からお聞きしたのはずっと後になつてからのことである。また当時は全国唯一の公募展であつた『泰東書道展』にその会から共に出品し、結果少年の部で全国只一人吉井天外（当時高橋辰雄）が「總裁官賞」に選ばれたのである。（昭和九年）。上掲の賞状がその時のもの。ちなみにその年の一般部受賞者は印南溪龍、熊谷恒子、大石隆子らという後年の巨匠達！後になつて様々な奇しき縁に導かれ江守先生にお近づきを許され、語り尽くせぬ程の薫陶に浴することになるのだが、屢々江守先生が「高橋君が東京の上野の美術館で豊道春海先生ぶんどうしゅんかいから直々に松本芳翠先生直筆の賞状を頂いて歸つた時の事や、以来ずっと学校の階段の踊り場に掲げてあつたその歐陽詢ばりの鮮やかな作品が、目を閉じれば今もはつきりと浮かんできますよ」と遙か遠くを見やるように懐かしげに話されたものである。

上京の折々にその聲咳けいがいに接し、都度何時間も書話三昧の時を過ごさせていただけたことも天外師の引き合わせの賜であつたらう。その敬愛する江守賢治先生も過日九十五歳にて天に還られた。三十数年前と違つて今の私には迷いや暗い気持ちとて更になし。只々書の素晴らしさと愉しさを二人の偉大な先生の心として伝え続けねばという確とした思いだけがある。